

北海道におけるアユの生態寸見

川那部浩哉（京都大学理学部動物学教室）

Biology of ayu-fish, *Plecoglossus altivelis*, in Hokkaido Island, the northern end of its distribution

HIROYA KAWANABE

アユのなわばりの氷期遺存習性説を傍証する作業の一貫として、1972年8月と1973年9月に北海道におけるアユの生息状況の調査を行った。

分布北限は、日本海岸では天塩川（パンケ沼における井上聰氏の採集個体2尾が、同氏の手元にある。北大・農・応動）であるが、例年溯上するのは札幌北西の厚田川であり、太平洋岸では戦前は遊楽部川の記録があるが、戦後は森町の鳥崎川までである。なお、厚差部町の旧家に残る記録により、松前藩時代から厚差部川にアユの生息していたことが確認されたので、大正年間に本州から移殖されたとの従来の説は訂正されるべきである。

脊椎骨数その他形態的特徴は、本州のものと著しくは異ならない。この点では、朝鮮半島産のものの方が、北方的な特徴を示している。

産卵期は8月下旬から9月上旬である。この点ではアユの産卵期が全面的には光周性によるものではないとする、西田の説を補強することになる。

夏季の社会的行動は、京都付近の海産アユに比べて、異った点を確認することができなかった。ただ、行動圏がやや広い特徴がある。なお、ヤマメないしアメマスと生息域が重っており、とくに瀬において共存するが、アユと他の2種との間には、特別の社会的関係を認めなかった。ただ体長30cmを越える個体の通過期には、アユがそれを避ける行動が見られた。

びわ湖産のアユのほうが、むしろ北方系の社会的行動を示すことと比較すれば、北海道におけるアユの分布はせいぜい1万年以内のことと考えて良いのかも知れない。

オセアニア産のカグヤシ ヨウジ ヨウバエ (*Zygothrica*) について

高田春夫（札幌大学教養部）

On the genus *Zygothrica* (Drosophilidae) from Oceania

HARUO TAKADA

雄の頭部が左右に異常伸長する種類のあることで知られているカグヤシ ヨウジ ヨウバエ属は、これまで46種が報告され、そのうちサモア産1種のほかは、すべて中・南米産で、特にブラジルに多く、他にボリビア、トリニダド、メキシコおよびキューバなどで若干知られていた。演者は、1972年に、マレーシア・クアラルンプール近郊の密林中で、*Zygothrica malayana* n. sp. および *Z. flavofinira* n. sp. の新分布を認めたが、さらに昨1973年には、西サモア・アピアの水源池附近で、*Z. samoensis* Malloch および、フィジー・レブカ島において *Z. fijiana* n. sp. をそれぞれ新鮮なキノコ（担子菌類）に飛来するものを採集観察した。

シ ヨウジ ヨウバエ科昆虫が主として、酵母菌類と乳酸菌群を feeding すると考えれば、feeding 又は breeding の場所として、高田(1971)やCarson(1971)らの云う 1) 落果、落花 2) 樹液 3) 腐蝕した幹、葉、樹、皮、根 4) 新鮮なキノコ 5) 生花 6) 潜葉 7) 共生 8) 高分子蛋白などが考えられ、これらのうち *Zygothrica* 属は、4) と 5) に集まることが判明している。

本大会では、高速で直線的に飛来する、丈夫な翅をもった大型種（約3.5ミリ）のフィジー産 *Z. fijiana* の feeding behavior について述べたい。即ち、この種の雄は、ハラタケ類似の白いキノコの傘の上で、飛来する他の個体に対して、攻撃的な行動をとるのを見受けたが、傘の裏側の暗褐色部位に移動すると前述の aggressive な行動は消え、雌雄が混在して、feeding をすることが判った。一方、ソロモン群島・ガダルカナルでは、*Zygothrica* に酷似した小型種 *Hirtodrosophila solomonica* n. sp. を採集した。